
武闘校

ジャングルタイテイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武闘校

【Nコード】

N5570I

【作者名】

ジャングルタイテイ

【あらすじ】

関東から広がった異界は全世界を包み。化け物が街を徘徊するようになった。それからさらに50年。化け物に対抗するための戦闘を教える「武闘校」での物語。

入学

世界に化け物が徘徊するようになって20年がたった。原因は驚異のウィルスのせいだとか、神の怒りだとかいるんな説が上がった。だが、生き残るのに必死で誰もそれを確認できていない。

その化け物と戦うために銃、刀、槍、ナイフなどあらゆる武器の所持を許可し、その扱い方を教える学校「武闘校」。僕は進学校から追い出されてここに押し込まれた。住民を守って武器を振るう。かつこいいと思うが、今のところ頭に浮かぶのは不安ばかりだ。

ロビーに入るとおかしな形のオブジェが目に入った。

受付のお姉さんと目が合う。理由はないけれどなんだか自分が情けない気がしてうつむきながら受付に向かった。

「刀剣科は・・・どこですか？」おどおどしすぎて変だっただろうか。「1階の奥ですよ。転入生だよ。武闘校へようこそ。いつてらっしゃい。」

最後に付け足されたいってらっしゃいの一言で僕の心は少し落ち着いた。

教室へ向かう途中の廊下の窓から他の校舎の屋上が見える。刀剣科と拳闘科の生徒だろうか。

片方はレイピアを構えてもう片方は素手でにらみ合っている。極限の緊張とはこういうのを言うのだろうか。二人の間の空気が張り詰めているように見える。

しかし、つぎの瞬間、決着は武器を打ち合わせることなく着いた。僕は目を疑った。

レイピアが持主の手を離れ浮いている。見間違いかもしれない。

僕は気にしないことにして歩き続けた。刀剣科1・3と書いてある教室を見つけて窓からのぞいてみる。

ぼっちゃりとした生徒の一人と目があつた。なぜだかお互いに会釈

する。

席をドアに貼ってある座席表で確認して部屋に入る。さっきのポツチヤリの隣だ。「こんにちは。新入生？」意外と少し高い声で話しかけてきた。「あ・うん。」

「武器なんにする？」前の席の茶髪が話しかけてきた。

「たぶん日本刀。」話しかけてきてくれる人がいてよかった。友達はできそうだ。

ガタンと音と共にドアが開いてボサボサの頭の少し若い男が入ってきた。たぶん先生だ。

「はい。朝のクラス会を始めますから、とりあはず座ってください。それと、転入の清水 健君。」

いたら返事してください。」

「はい。」

先生は眼鏡をかけてこつちを見た。「あ。じゃあこれ終わったら来てください。書類があるんで。」

「はい。」

僕が軽く頭を下げると先生はうなづいた。「はい。じゃあクラス長。終って大丈夫です。」

「きょうつけ！礼！」大きな透き通った声でクラス長と呼ばれた少年が号令をかけると

皆がそれに合わせて礼をした。先生が教室を出るとクラス長と他の生徒が何人か周りに集まった。

「俺、クラス長のシン。」「ケンっていいいます。はじめまして。」

手を差し出されたので握手した。先生に呼ばれているのを思い出した。

「俺、先生のところ行ってくるから。」「うん。行ってらっしゃい。」

教員室は2階のはずだ。階段を駆け上がると、すぐに目の前でファイルをいじっているさっきの先生がいた。「あの・・・清水健です。」先生はファイルを閉じて書類を抜き取ると、それを僕に渡し

て笑った。よく見るとこの人いわゆるイケメンではないか。「俺は神童 剛っていいいます。これ書いて、2時間目の後の休みに持ってきて。」教室に戻って書類にとりあいず名前と使用武器と出席番号を書いたところで先生が来た。

今度のは髪の毛の薄い体のがつちりしたオジサンだ。「一時間目は筋トレです。」筋肉トレーニングに一時間使うのか。一人一人に違う道具を渡しているようだ。さっきのポツチャリはバーベルを渡され、僕はダンベルを渡された。「転入生だね。筋力レベルが低いから、君はまずはダンベルからね。両手で扱う武器を使いたいなら腕力はしっかりつけなきゃね。」コクリとうなずくと先生はニンマリとした。筋トレの授業といってもさすがに一時間ずっと筋トレをしているわけではないようだ。

15分やって5分休むのを3回繰り返して授業は終わった。やってる最中は何ともなかったが、腕がずきずき痛んで2時間目の前の休み時間書類を書こうと思ったが、鉛筆を持つ腕が上がりなかつた。必死に書き上げていると二時間目のチャイムがなりだした。

入学（後書き）

「空を見て想う」という曲を聞きながら思いついた話を書いてみました。ました。動画サイトなどで聞いてみてください。

寮生活（前書き）

比較のおとなしい性格の主人公にしてみました。どうですか？

寮生活

パソコンの電源をつけて連絡の為に入れた通話ソフトを起動させる。母親のパソコンの電源はついているようだ。

だが、クリックしても反応がない。

思い出せば反応してくれるわけない。高いお金を払って僕を塾に行かして進学校に入ったと思ったら、「雰囲気や気に食わない」なんて理由で僕は退学してしまった。

進学校への入学が決まったとき、祝福してくれた親戚や友達から連絡はまったくくない。

しばらくボーっとそんなことを考えてドアがドンドンなっていることに気づいた。物思いにふけていて気付かなかった。「おーいケン君。オデだよ。」「オデ……って誰さ。」「さっきのポツチャリの少年だろうか。」「ガチャ。」

「ケン君の部屋にテレビないでしょ。お母さんから新しいのが来たから古いやつ君にあげるよ。」「なんだかオットリした子だ。」

「あ……ありがとう。たすかるよ。えっと、なまえなんだっけ。」「ポツチャリは僕の反応に満足そうに笑った。「僕はツムグ。席隣だし。これからよろしくね。」「

「うん……。あっそうだ。なんか食べてく?」「感情が顔に出るタイプなのだろう。ツムグの顔は残念そうに変わった。」

「ぼく、これから観たい動物番組があるんだ。」

僕はこういう素直な奴が好きだ。

「そっか。じゃ、また明日ね。」「

「うん。じゃあね。」「残念そうな顔のまま、ドアを閉めてツムグは自室に帰って行った。」

棚からクラスメイトの表を引っ張り出して、ツムグという名前を探
す。

「あつた！えつと・・・熊村 紡 使用武器：両手剣（大型）」
大型・・・ってなんだろう。他の人のも見してみよう。

表を見渡しているうちに瞼が重くなってきた。自室に戻ったらゲー
ムやったりマンガ読んだりしようとおもっていたはずだったが、僕
は睡魔に勝てずベットに倒れこんだ。

エスパー演習

その日、僕は前の席に座っている茶髪に誘われて皆で食堂で昼食をとることにした。

皆、僕が何か言うのをまっぴとこっちを見ている。何か話題を作らなければ。

「ねえエスパーっているのかな。」

「何で？エスパークラスのこと？」

また意味のわからない言葉が出てきた。異世界からやってきたような気分になる。

「エスパークラス？」女の子が顔を思いつきり近付けてきた。ドキリとして、思わず顔を引いた。

「学園の外の人は知らないでしょ。エスパーを使える戦闘員養成クラス。その能力は各々違うけど、皆が特別な力を使える最強の戦闘集団。最初、見た時はみんな驚くよ。」

茶髪がカバンからプリントを取り出して、僕に見せた。

「ほら一週間後にエスパー演習があるよ。エスパークラスと普通のクラスで戦闘訓練するんだけど、まあふつうは勝てるわけないよ。」

基本的にエスパークラスのための訓練で、負けるのが俺たちの役目。

「

そんな・・・わざわざ何で痛い目にあう訓練なんか受けなくちゃいけないのだろう。ツムグが思い出したよう早口で話し始めた。

「でも、今回はわかんないよ。キョウ君がいるしケンもいる。ケンの実力は未知数だよ。」

僕にそんな期待をされても困る。

「あいつって？」

「キョウ。化け物だよ。アイツは。」女の子はなぜか大興奮している。

「普段はそんなそぶりないんだけどね。下手すりゃ一番弱く見える。」

L

名刀入手

「エスパー・・・」

本当にいるのか。そんなものが。

「エスパー」とネットで検索すれば情報はたくさんあるだろう。

勝てるとは思わないけど、できるだけ情報を集めてみよう。できるだけ痛い思いをしないためにも、しっかり調べておかなければ。

「ねえ、ケン君。」ルイがムツとしている。ルイは、刀剣科唯一の女性。紅一点というやつだ。

僕は、女性と付き合うのは苦手だ。恐怖症というわけでもないし、興味がないわけではない。

逆に意識しすぎてしまうのだ。

ここで何も言わないと無視していると、勘違いされることがある。

「うん？」

「どうして、日本刀にしたの。」

僕は別に日本刀の扱いに優れているわけではない。学校でやっていた僕がやったことのある武道が剣道だったただけだ。

「得意じゃないけど、学校でやったことがあったのが剣道だったから。」

「でも、日本刀って重くない？」

「でも、かつこいいし・・・」本当のことを言えばそんなに深く考えてなかった。

使用武器の申請はしたが、まだ実物には触っていない。日本刀が見た目以上に重いというのは聞いたことがある。

竹刀しか振ったことがない僕がちゃんと扱えるのか、不安になってきた。

「いまなら、まだ変えられるかもよー。」

「じゃあ、いつてこよっかなあ。」

僕は、職員室という空間自体がそんなに好きじゃない。

「剛先生いらっしやいますか。」おそろおそろ覗き込む。

「あ・・はい。どうしましたか？」剛先生は清潔感がある。女子にもきつと人気があるのだろう。

「刀って結構重いつて聞いたんですけど、変えた方がいいんですかね。」

「ああ・・・どうだろね。どうせ毎日、筋トレさせられるし、あんまり気にすることないと思うけどね。」

「はあ、そうですね。」僕は知識が何もないので、言われる通りに頷くしかない。

「それに確か君の刀の制作してくれるのは、軽い刀を作ること有名な刀工ですよ。」

今日の夜には、君の部屋に届いているはずですから。実際ちょっとぐら触ってみて、きにくわなかつたら、もう一回来てみてください。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5570i/>

武闘校

2011年1月8日20時10分発行